

■ 第 14 回精神障害者自立支援活動賞（リリー賞）受賞者 【支援者部門】

働く精神障害者の相談先の役割を担い、企業や地域住民も参加する交流会を通じて地域定着・就労継続を支援

社会福祉法人さんかく広場 就労障がい者交流拠点事業「りんく・じょい」 【高知県高知市】

「りんく・じょい」は、精神障害者の自立支援に取り組む社会福祉法人が、高知県からの委託を受け 2015 年に開始した事業。働く精神障害者に「愚痴をこぼせる」場や夕食の場、ファッション・メイクアップをはじめ様々な「生活を楽しむ技術」を習得する場を提供している。活動の企画や運営にあたるのは、地域の人や当事者も含めた「りんく・じょい助っ人会」。当事者、地域住民、企業が「楽しむこと」でつながる仕組みをつくり、生活の面から精神障害者の就労を支援する独自性が高く評価された。

●就労障がい者交流拠点事業「りんく・じょい」の取り組み

「社会福祉法人さんかく広場」の 1 事業「りんく・じょい」は、当事者と地域住民が主体となり、活動の企画・運営を行っているのが特徴だ。参加する当事者は、統合失調症やうつ病、発達障害、双極性障害など精神疾患の人が中心。事業開始の背景にあるのは、当事者の離職率の高さだ。就労定着のためには「働いて得たお金をどう使えばよいのか」などの悩みを解消し、当事者が生活を楽しみ、地域と関わりながら自立していくことが大切だとの考えがもとになっている。

●「生活を楽しむ技術」を伝える交流活動

年間約 10 回ある交流活動には地域行事も含まれるが、中でも企業の協力を得ながら開催する講座がユニークだ。メイクアップや料理、「上手なお酒の断り方」を学ぶ酒どころ高知ならではの企画もあり、当事者が生活を楽しむ技術を地域の人と交流しながら習得できるよう工夫している。

●「楽しんでつながること」

事業名のとおりに「楽しんでつながること」が何より大切」と話すのは事業責任者の伊藤英助さん。スタートから 2 年ほどは伊藤さんが企画から運営までをひとりで担当していたが、「楽しそう」と地域の人たちの参加が徐々に増え、昨年 6 月には運営組織「りんく・じょい助っ人会」が発足。事業開始の頃から、「りんく・じょい」を手助けしてくれる人を「助っ人」と呼んでいたことが会の名前の由来だ。「助っ人会」のメンバーは当事者と地域住民がほぼ半々で、毎月ミーティングを行い、企画を出し合っている。「地域の人にとっては、“この人と、この場所でどう生きていくか”ということのほうが、その人の病名を知ることよりも大切なんです」と伊藤さん。

●活動を続けること

「りんく・じょい」では「ボランティア」や「共生社会」という言葉をあえて使わない。誰でも気軽に参加できるようにしたいからだ。「この活動、楽しんでもらってなんぼ、なんです。障がい者のために、などと肩肘張らずに、楽しそうだから、という軽い気持ちで来てほしいです」（伊藤さん）



活動拠点は「さんかく広場」が運営する「SUN CAFE」。働く当事者が夕食をとったり、愚痴をこぼしたりできる場。講演会などの交流活動の会場にもなる。



たくさんの人に興味を持ってもらうため、活動の告知チラシに工夫を凝らす伊藤さん。SUN CAFE のお客さんの中には「チラシを見て来てみました」という地域の人も。



「助っ人会」のミーティング。当事者の参加者からは「りんく・じょい」に参加するようになって「近所の人とも挨拶をするようになった」などの声も聞かれる。